

國學院大學學術情報リポジトリ

策彦周良と杜甫：『謙齋南遊集』を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 陳, 茜 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001609

策彦周良と杜甫

—『謙齋南遊集』を中心に—

Sakugen Shūryō and DU Fu:
As in *Kensai nan'yūshū*

陳 茜

キーワード：策彦周良 『謙齋南遊集』 杜甫 詩 受容
关键词：策彦周良 《謙齋南遊集》 杜甫 詩 影响

要旨

平安時代における白楽天受容の隆盛に対し、禪林文学時代になると、一転して李白、杜甫、蘇軾、黄庭堅が高く評価された。後期の五山文学における代表的人物の一人として、策彦周良も杜甫の影響を大いに受けている。策彦の代表的な詩集である『謙齋南遊集』では、杜詩の典故を巧みに引用しており、そのまま引用するのみならず、同様の身の上にも慨嘆している。相似した境遇によって、策彦が杜甫に近づこうとした。一方、杜詩を吟唱することを通じて、苦悶と抑鬱を解消していた。そこまで杜甫を模倣したのは時代の風潮、策彦周良自身の崇拜と努力及び中国での体験とは無関係ではない。

摘要

相较于王朝时代独盛“白乐天风”，日本五山汉文学时代主要崇尚李白、杜甫、苏轼、黄庭坚。策彦周良作为日本五山汉文学的后期代表，其代表诗集《谦斋南游集》中不仅多处巧妙引用杜诗典故，而且通过吟诵杜诗排解乡愁。此外，二人相似的人生际遇使得策彦周良更加亲近杜甫。对杜诗能达到如此之高的教养水平，盖因策彦周良自小学习杜诗为此打下坚实基础，平日大量抄录杜甫诗句，日积月累，两次来华的中国体验使其进一步加深对杜诗的理解并接触到杜甫研究的最新学术成果。

はじめに

日本漢文学史において最も注目されるのは平安時代の貴族文学、中世時代の禪林文学、江戸時代の儒者文学という三つの時期である。平安時代における白楽天受容の隆盛に対し、禪林文学時代になると、一転して李白、杜甫、蘇軾、黄庭堅が高く評価された。

これまでの先行研究はほぼ杜甫の五山禪林への影響を検討してきた。各五山禅僧の具体的かつ個別的な影響は義堂周信と雪村有梅などに中心となっている。管見の限り、策彦周良を中心とした杜甫受容の研究は殆どない。

杜甫(712-770)は中国盛唐の詩人であり、字が子美、号が少陵野老、杜陵野老、または杜陵布衣であり、杜少陵、杜工部、杜拾遺とも呼ばれる。「詩聖」と呼ばれ、その詩を「詩史」と称された。杜詩は中国の文学にも日本の文学にも大きな影響を与えた。

策彦周良(1501-1579)は字を策彦、名を周良、別号を怡斎(後に謙斎と変更)といい、戦国時代の天竜寺の塔頭妙智院の住職であった。「勘合貿易」の副使と正使として二回渡明した。彼の代表的な詩集である『謙斎南遊集』は中国滞在中に作られた漢詩を摘録したものであり、別号「謙斎」を題目として「謙斎南遊集」と名付けられた。ともに126首が収録され、その中で策彦が作ったのは116首である。体裁の面では、策彦周良の漢詩の中で、七言律詩が6首、五言律詩が3首、七言古句が1首あり、他はすべて七言絶句である。

五山文学の後期における代表的人物の一人として、策彦周良が杜甫の影響を受けているのは言うまでもない。本論文では『謙斎南遊集』⁽¹⁾において、策彦周良は杜甫に対してどのような感情を持っているのか、杜詩からどのように影響を受けているのか、また、如何に彼の漢詩の中で反映されているのか、について明らかにしたい。

一、典故の引用

1、「倚楼」

『謙斎南遊集』において、以下の一首の漢詩がある。

南滄老人復見寄五言詩篇，再和而遣懷云⁽²⁾

郷情猶未忘，夜夜幾刀州。

君有同風句，吾無明月投。

芋羊難辨錯，蘭鮑豈堪儔。

(1) 牧田諦亮：『策彦入明記の研究』(上)，仏教文化研究所，1955年，第270-282頁。

(2) 牧田諦亮：『策彦入明記の研究』(上)，仏教文化研究所，1955年，第271頁。

他日如相許，披襟共倚樓。

「私」は故郷を忘れず、よく夢に見た。君の漢詩は素晴らしいのに対して、「私」の漢詩は下手なので恥ずかしかった。君の人柄が蘭のように高潔で、こんな「私」と友になるのはありえないことだろうか。もし約束すれば、一緒に襟を披き、樓の欄干に倚ったらどうだろうか。

この漢詩は策彦周良の日記である『初渡集』の中で明記されている。

嘉靖十八（天文八，1539）年七月二十八日⁽³⁾条：

齋後，宗桂以事過趙氏兄弟家，余和前韻二首贈焉，且又以美濃紙一帖付一元，蓋朱墨回禮。

向賜累篇，宛如錦上添花，余雖駑鈍，倘默止則厥罪多多，聊附韻尾者一絶，投幾右以需改教云。生等日夜待天詔之降，故末句及之。

孤館蕭條無客來，佳篇落手興悠哉。

幾回北望帝京立，不識詔書裁未裁。

又次一元韻，一元號南滄。

效顰者一篇挑再和云。

鄉情猶未忘，夜夜幾刀州。

君有同風句，吾無明月投。

芋羊難辨錯，蘭鮑豈堪儔。

他日如相許，披襟共倚樓。

「趙氏兄弟」は寧波文人である兄の趙一夔と弟の趙一元を指している。趙一元は号を南滄と言うが、官職などの経歴は明らかでない。『初渡集』によると、趙一元の漢詩は七月十九日に策彦に送られたが、残念ながら、この漢詩は『初渡集』の中には記録されていない。

嘉靖十八（天文八，1539）年七月十九日⁽⁴⁾条

晚景宗桂歸館，一夔又寄一詩，弟一元亦惠詩並朱墨一塊。

策彦周良の漢詩における「倚樓」という言葉が杜甫の詩から引用されているわけである。杜詩は以下の通りである。

江上⁽⁵⁾

(3) 牧田諦亮：『策彦入明記の研究』（上），仏教文化研究所，1955年，第69頁。

(4) 牧田諦亮：『策彦入明記の研究』（上），仏教文化研究所，1955年，第68頁。

(5) 杜甫（撰），仇兆鰲（注）：『杜詩詳注』巻15，中華書局，2015年，第1096頁。

江上日多雨，簫簫荆楚秋。
高風下木葉，永夜攬貂裘。
勲業頻看鏡，行藏獨倚樓。
時危思報主，衰謝不能休。

大歴元(766)年、杜甫が病を多発していたが、もとより報国の志を抱いていたので、成都より長江に沿って首都の長安に戻った。途中で夔州に泊まり、この詩を作った。国を憂いたため、夜は寝付くことが出来ずにいた。頻りに鏡を見たり、樓の欄干に倚ったりした。皇帝に報いる志があるので、体の状態が大丈夫なのかを何度も確認し、心配したという気持ちがうかがえる。

「倚樓」という単語が杜甫による初めて作り出された。策彦の詩句「披襟共倚樓」は杜詩の「永夜攬貂裘」、「行藏獨倚樓」という二つの詩句から引用されている。策彦の漢詩の中で、杜詩と全く違い、「倚樓」は友人の間に隔てなく打ち明けるという感情を表している。この点から見れば、策彦が杜詩の詩句を機械的にはめるのではなく、巧みに引用しているレベルに達してきたと言えるだろう。

2、「明朝四十」

『謙齋南游集』において、「除夜」という漢詩がある。

除夜⁽⁶⁾

半是尤人半怨天，明朝四十下灘船。
殘燈一點千金買，未到曉鐘猶舊年。

又用前韻

榮辱昇沈雖付天，天涯愧我跡如船。
有何顏色對春色，生不成名四十年。

除夜、人を怨んで天を怨みながら、四十年間生きていたのに、名をはせなかった。榮辱消沈が天によって決まるとはいえ、この時の自分が小船のように、大洋を越えて他郷で漂泊していたと策彦が慨嘆した。

策彦周良は嘉靖十八(1539)年中国に初渡し、同年十月十七日に貿易団を率いて北京に赴き、除夜の時、鍾吾駅(現在の江蘇省宿遷県)に宿泊した。この時、

(6) 牧田諦亮：『策彦入明記の研究』(上)、仏教文化研究所、1955年、第279頁。

策彦(1501 - 1579)が39歳で、翌日40歳になるので、「明朝四十」という言葉が出てきた。『初渡集』の中でこの漢詩も記録されている。

嘉靖十八(天文八, 1539)年十二月三十日⁽⁷⁾条:

天氣佳暄, 余偶作除夜詩。
半是尤人半怨天, 明朝四十下灘船。
殘燈一點千金買, 未到曉鐘猶舊年。

又用前韻

榮辱昇沉雖付天, 天涯愧我跡如船。
有何顏色對春色, 生不成名四十年。

この漢詩から見ると、策彦は禅林の中で立身出世しなかったことがわかった。では、策彦の四十歳までの人生はどのようなものであったのだろうか。初渡の嘉靖十八(1539)年に、今までの人生を一度顧みたことがあった。内容は以下の通りである。

余甫九齡冬杪, 投先師心翁和上籌室。……凡朝經夕梵, 觸耳輒語, 過目則誦, 師驚歎為天稟。明年正月喧鶯之末, 有門徒小單尺, 以《年後梅花》為題, 師命余書焉, 憐子忘醜者乎, 余不辭而迅筆寫此題, 師比小德莫鴉, 人皆擬小王飛白。……師隕涕而感曰: “此兒異眾, 真釋氏種草, 必當興吾門。” ……十四歲, 三月二十日乃佛國國師二百年諱也, 台旆入山, 余為之給侍, 蓋此職在叢林為貴, 其來尚矣, 非良家之子, 難當其任。如余族譜, 雖出細川氏幕下, 殆與馬前卒為伍耳。鹿苑大宗主, 近舍其族, 遠取其才, 登庸榮除, 不亦寵乎。……十九歲, 臘月綴詢南英住備之井山諸山疏, 余袖之出示東山諸宿, 雪嶺、月舟二大老駢擒詞稱美。二十一歲, 結制令辰, 據虎丘位。秉龜毛佛, 答話的確, 一眾許以英敏。……二十四歲, 代雪嶺和上, 制有自禪師建仁入院道舊疏語。和上初致書, 有“煩足下大手筆”之語, 榮莫榮焉。有時參詩, 而風品月評。有時聯句, 而句煨旭煉。借螢光惜駒陰, 動忘寢食, 勤則勤矣。無幾年已迫不惑, 然而才不見稱於人, 學不見助于友。加之病懶相仍, 百不記一。于朝于昏, 忘帚忘苦, 只自嗟恨耳。古不云乎: “童而習之, 白紛如也。” 又不云乎: “靡不有初, 鮮克有終。” 此言不誣矣。犹且細大操履, 不足枚舉。⁽⁸⁾

(7) 牧田諦亮:『策彦入明記の研究』(上), 仏教文化研究所, 1955年, 第114頁。

(8) 牧田諦亮:『策彦入明記の研究』(上), 仏教文化研究所, 1955年, 第78-79頁。

以上のように、策彦は24歳までの人生に対して誇りを持っていて、「師以比小徳莫鴉，人皆擬小王飛白」と褒められ、聡明で機敏で、詩文が称賛されたりしたが、24歳以後、一変して自分の現状に不満を表し、「然而才不見稱於人，學不見助於友」、「犹且細大操履，不足枚挙」などの言葉が頻繁に出てきた。

この漢詩を作ったとき、策彦は勘合貿易団の中で、副使の肩書を持っており、日本の禅林における肩書が天竜寺の首座及び天竜寺の塔頭妙智院の住職だった。『大辞林』によると、首座は「禅寺で、修行僧の中で第一席にある人、住持の次席。」だと書いてある。五山における昇進が幕府の任命によって決まるのに対して、塔頭の住職が師弟の関係によって伝承される。

策彦周良は22歳の時、頭角を現すにあたって、師心翁等安がなくなり、長期に天竜寺に寄付していた細川高国が戦争の敗北によって自殺したということが次々と起こった。親密な間柄を持つ二人を立て続けに失ってしまったから、策彦は禅林における出世に大きな影響をうけたと言っても過言ではないだろう。

この漢詩を作ったとき、策彦周良にとって、直面している進路における最大の困難は五山禅寺の住職になれなかったことだろうと思われる。

慣例によって、遣明使が帰国した後、奨励として幕府から五山禅寺の住職に昇任させる公帖が発給される。このことは、策彦周良の遣明がこの局面を打破しようとする行動だと理解できるのではないだろうか。

「明朝四十」という言葉は杜甫の詩にも出てきた。内容は以下のとおりである。

杜位宅守歳⁽⁹⁾

守歳阿戎家，椒盤已頌花。

盞簪喧柝馬，列炬散林鴉。

四十明朝過，飛騰暮景斜。

誰能更拘束，濫醉是生涯。

明日になると、四十歳を過ぎ、強仕の年であるのに、そしてようやく官職を任命されるチャンスを得たにしても、人生はもう暮景のように残る時間がそんなに多くなかった。

天宝十(751)年、杜甫は従弟の杜位の家に新年を迎えた。同年正月、杜甫が『朝献太清宫賦』、『朝享太廟賦』、『有事于南郊賦』を皇帝に捧げ、皇帝が大喜び、

(9) 杜甫(撰)、仇兆鰲(注)：『杜詩詳注』巻2、中華書局、2015年、第96頁。

杜甫に集賢院に登録させて任命を待たせた。

さて、杜甫の40歳までの人生はどのようなものであったらうか。

杜甫は少年時代に才能を賛美され、例えば、杜甫の『壯遊』において、「七齡思即壯，開口詠鳳凰」⁽¹⁰⁾という詩句がある。『杜工部年譜』によると、開元二十三(735)年、24歳のとき、杜甫は洛陽で科挙試験を受けたが落第した。天宝六(747)載、36歳のとき、唐玄宗が天下の一技を持っている人材を探そうとして、特別の試験を設けた。李林甫のために、結局一人も受からなかった。従って、李林甫が唐玄宗に「民間で賢者が一人も漏れなく、全部朝廷に受用られた。」と祝った。残念ながら、杜甫も今回の試験を受けた。天宝十(751)載の正月、杜甫が唐玄宗に『朝獻太清宮賦』、《朝享太廟賦》、《有事于南郊》という三つの賦を捧げ、ようやく官職を任命されるチャンスを得た。この時、「四十明朝過，飛騰暮景斜」という詩句を作った。

相似の境遇から、同様の身の上の者であるとして、策彦は杜甫に近づこうとしたと考えられる。

3、他の例

以上の二例が偶然のことではなく、『謙齋南遊集』に収録されていない策彦周良の漢詩にも杜甫の詩句を巧みに引用している。以下に例を挙げよう。

嘉靖十九(天文九、1540)年七月廿六日⁽¹¹⁾条：

正使和上有偈，予依其韻。本韻「過二年」、「淚淒然」、「供梵天」

人生莫道百千年，蝶夢遽然又栩然。請看闔浮舊顏色，一方明月屋頭天。古句云：“豈知潭底月，元在屋頭天。”又老杜《夢李白》詩云：“落月滿屋梁，猶疑照顏色。”

莊子が瞬間に胡蝶に変わり、人生が千百年あるとはいえない。人間世界の変わらざる様相を見てみよう。屋上の上、遠くの空、月が明らかに輝いていた。この漢詩は勘合貿易の正使である湖心碩鼎が「年、然、天」を韻にして偈を作り、策彦が次韻したものである。

策彦の漢詩の転・合句は「豈知潭底月，元在屋頭天」、「落月滿屋梁，猶疑照顏

(10) 杜甫(撰)、仇兆鰲(注)：『杜詩詳注』巻16、中華書局、2015年、第1185頁。

(11) 牧田諦亮：『策彦入明記の研究』(上)、仏教文化研究所、1955年、第42頁。

色」より転換してきたものである。「豈知潭底月，元在屋頭天」⁽¹²⁾という詩句は中国禅僧の詩句である。「落月満屋梁，猶疑照顔色」という詩句は杜甫の『夢李白二首』(其の一)という漢詩から出てきた。以下の通りである。

夢李白二首⁽¹³⁾(其一)：

死別已吞声，生別常惻惻。
江南瘴癘地，逐客無消息。
故人入我夢，明我長相憶。
恐非平生魂，路遠不可測。
魂來楓林青，魂返關塞黑。
君今在羅網，何以有羽翼？
落月満屋梁，猶疑照顔色。
水深波浪闊，无使蛟竜得。

乾元元(758)年、李白は貴州省夜郎に左遷され、二年、恩を承って放逐された。乾元二(759)年、杜甫は甘肅秦州に左遷され、友人の李白の左遷の情報を知り、彼の身上を憂いたので、この詩を作った。月が屋上に明るく輝き、宛も君(李白)の顔を映っているようだった。

杜詩の詩句は宋玉の『神女賦』の「耀乎若白日初出照屋梁，其少進也，皎若明月舒其光」⁽¹⁴⁾や魏甄皇后の詩歌『塘上行』の「想見君顔色，感結傷心脾。」⁽¹⁵⁾から引用したものである。

魏甄皇后の詩句における「顔色」は杜詩と同じく、人の顔を指している。これに対して、策彦周良の詩句における「顔色」は人間世界の様相という意味に変わった。

二、杜詩の吟唱

1、苦悶の解消

五山詩僧がよく中国の有名詩人の詩歌を吟唱することを通じて、苦悶と抑鬱を

(12) (宋) 蹟藏編：『古尊宿語録』巻45「禪定軒十偈」(其六)，上海古籍出版社，第550頁。

(13) 杜甫(撰)，仇兆鰲(注)：『杜詩詳注』巻7，中華書局，2015年，第463-464頁。

(14) 簫統編：『文選』巻19，中州古籍出版社，1990年，第252頁。

(15) 劉玉偉，黃碩評注：『古詩十九首 玉台新詠』，中華書局，2016年，第108頁。

解消する。策彦も同様である。例えば、『謙齋南游集』における『夜来郷志曲折，耿不安枕，時將微曉，余适哦老杜「秋天不肯明」句之頃，樂音琅琅然，起自外面，頓有阳春冲融之氣，使人散羈憂。(中略)。此礼樂之美，感嘆无措，作詩遣懷云』⁽¹⁶⁾という漢詩は、『初渡集』によると、嘉靖十八(天文八、1539)年八月十一日に作られた。その時、策彦周良は初めて海を越え、遠い異郷の中国に来、寧波で明側の入京許可書の発行を待ち焦がれていた。この日の夜、ふとふるさを深く懐かしんできて、夜明けまでなかなか眠れなかった。ようやく夜が明けてきた時、策彦は杜詩の「秋天不肯明」を吟唱すると同時に、音楽が朗々と外から聞こえてきた。そのとたんに陽気が杞憂を散らしたようだ。

「秋天不肯明」という詩句は杜甫の『客夜』という詩から出てくる。

客夜⁽¹⁷⁾

客睡何曾著，秋天不肯明。

捲簾殘月影，高枕遠江聲。

計拙無衣食，途窮仗友生。

老妻書數紙，應悉未歸情。

宝応元(762)年秋、杜甫が四川省の綿州まで友人を送り、その後成都に戻ろうとしたとき、成都で戦乱が起こったため、四川省の梓州へ避難した。そこで、成都にいた家族と離散してしまい、彼らの安全を心配し、徹夜して眠れなかった。時間の流れが遅く感じ、なかなか夜明けにならなかったのも、まるで秋がわざと夜明けになりたがらないかのようだ。

同様の情況、同様の感情は策彦周良に「秋天不肯明」を思い出せた一方、策彦はこの詩句を吟唱することを通じて、郷愁が一気に吹っ切れた。

2、他の例

策彦周良が杜甫の詩句を吟唱することを通じて気分転換するのは偶然のことでなく、他の例が挙げられる。

嘉靖十九(天文九、1540)年八月五日⁽¹⁸⁾条

辰刻，偕大光、釣雲遊金山寺。去年所面之僧，一見相識，擊茶杯，予偶哦

(16) 牧田諦亮：『策彦入明記の研究』(上)，仏教文化研究所，1955年，第273頁。

(17) 杜甫(撰)，仇兆鰲(注)：『杜詩詳注』卷11，中華書局，2015年，第772頁。

(18) 牧田諦亮：『策彦入明記の研究』(上)，仏教文化研究所，1955年，第143頁。

「寺憶曾遊処」之句。

朝八時頃、策彦周良は勘合貿易の団員である大光、釣雲を連れて金山寺を訪ね、去年顔を合わせた僧侶が策彦周良を見た瞬間、すぐ思い出した。四人で一緒にお茶を飲んで、場所にしても人物にしても去年と同様であったので、策彦周良は思わず「寺憶曾遊処」を口に出した。

この詩句は杜甫の『後遊』の一句である。

後遊⁽¹⁹⁾

寺憶曾遊処、橋憐再渡時。
江山如有待、花柳自無私。
野潤煙光薄、沙暄日色遲。
客愁全為減、舍此復何之？

再び「修覚寺」を遊覧した際、かつて訪ねた所を依然として覚えていて、その橋も愛おしいと思った。

安史の乱のため、杜甫が乾元二(759)年戦乱を避け、成都に一時滞在していた。上元二(761)年の春、杜甫が「修覚寺」を二度訪れ、この詩は二度目の遊覧時に作られたものである。「修覚寺」は蜀州新津県にある。目の前の美しい景色を眺めながら、杜甫の心の中の郷愁がすべて消えてしまった。

以上の例をみると、策彦周良は杜甫の漢詩を深く理解し、自分の生活につなげていた。策彦がそこまで杜甫を模倣したのは、いくつかの理由を挙げられる。

三、教養の育成

1、子供時の勉強

十一歳之夏、北鹿不幸嬰賊火之災……遂従師之後到西山……師遂退休於丹之先盧性智禪。余又隨侍巾瓶、隨侍之暇、《論語》、《孝經》、杜詩、蘇二黄九二集等、太半自書以誦唱矣……十四歳、三月二十日乃佛國國師二百年諱也(略)⁽²⁰⁾

子供の頃、策彦周良は師心翁に仕えながら、暇がある時に『論語』、『孝經』、杜

(19) 杜甫(撰)、仇兆鰲(注)：『杜詩詳注』巻9、中華書局、2015年、第654頁。

(20) 牧田諦亮：『策彦入明記の研究』(上)、仏教文化研究所、1955年、第78頁。句読点は筆者によるつけたものである。

甫の詩、蘇軾と黄庭堅の詩集など、概ね自ら写して暗誦した。こうして杜詩は五山禪林における必読書になり、禪林における隆盛の一側面がうかがえる。斯くして、策彦は漢詩文の基盤を厚く構築できたといえる。

2、杜詩を摘録する

策彦周良は長い時間をかけ、漢詩文を大量に吸収していた。例えば、中国に滞在中、煩わしい公務の処理が忙しいにもかかわらず、ほんの空いている時間があれば、中国の漢詩文を学び、その中で大量の杜甫の詩句を摘録した。以下の例が挙げられる。

(1) 嘉靖十七(天文七, 1538)年七月廿九日⁽²¹⁾条:

老瓦盛 莫笑田家老瓦盆, 自從盛酒長兒孫。杜

これは策彦周良が杜甫の詩を例とし、「老瓦盛」という言葉の使い方を学んで写したものである。この詩句は杜甫の『少年行』という詩から出てくる。

少年行⁽²²⁾(其一)

莫笑田家老瓦盆, 自從盛酒長兒孫。

傾銀注瓦驚人眼, 共醉終同臥竹根。

この詩は上元二(675)年の夏、杜甫が成都にいたときに創作したものである。農家の瓦による作られた盃にしても、貴族の玉による作られた盃にしても、酒に酔うと、みな同じく竹の根元に臥すので、貴賤の区別がないという少年を論ず漢詩だと言えよう。

(2) 嘉靖十九(天文九, 1540)年十二月五日⁽²³⁾条

①聖朝無棄物。杜甫

②端午被榮恩。杜甫

これは策彦が勘合貿易の任務を終え、寧波で帰国の順風を待っていた時、中国の漢詩文を摘録したものである。

①は杜甫の『客亭』から出てくる。

客亭⁽²⁴⁾

(21) 牧田諦亮：『策彦入明記の研究』(上), 仏教文化研究所, 1955年, 第4頁。

(22) 杜甫(撰), 仇兆鰲(注):『杜詩詳注』巻10, 中華書局, 2015年, 第704頁。

(23) 牧田諦亮：『策彦入明記の研究』(上), 仏教文化研究所, 1955年, 第164頁。

(24) 杜甫(撰), 仇兆鰲(注):『杜詩詳注』巻11, 中華書局, 2015年, 第773頁。

秋窓猶曙色，落木更天風。
日出寒山外，江流宿霧中。
聖朝無棄物，老病已成翁。
多少殘生事，漂零任轉蓬。

これは宝応元（762）年の秋、以上の『客夜』と同時に作られた漢詩である。「聖朝無棄物」という詩句は孟浩然の『歳暮帰南山』における「不才明主棄，多病故人疏」⁽²⁵⁾という詩句から引用したものである。

②は杜甫の『端午日賜衣』という詩から出てくる。

端午日賜衣一⁽²⁶⁾

宮衣亦有名，端午被恩榮。
細葛含風軟，香羅疊雪輕。
自天題処濕，當暑著來清。
意内称長短，終身荷聖情。

乾元元（758）年五月、杜甫は拾遺を任命されたので、「端午被恩榮」という詩句を作った。

(3) 嘉靖二十（天文十，1541）年二月十三日⁽²⁷⁾ 条

一別五秋蛩，杜子美⁽²⁸⁾ 句，或作五飛蛩，「七飛蛩」ハ坡句云。

「一別五秋蛩」は杜子美の詩句であり、或いは「五飛蛩」としている。「七飛蛩」は蘇軾の詩句である。

これも策彦周良が勘合貿易の任務を終え、寧波で帰国の順風を待っていた時間に摘録したものである。

杜子美は即ち杜甫であり、「一別五秋蛩」は『戲題寄上漢中王三首』（其一）から出てくる。

戲題寄上漢中王三首⁽²⁹⁾（其一）

西漢親王子，成都老客星。
百年双白鬢，一別五秋蛩。
忍断杯中物，祇看座右銘。

(25) 『全唐詩』第3函第3冊，上海古籍出版社，1993年，第376頁。

(26) 杜甫（撰），仇兆鰲（注）：『杜詩詳注』卷6，中華書局，2015年，第400頁。

(27) 牧田諦亮：『策彦入明記の研究』（上），仏教文化研究所，1955年，第182頁。

(28) 東京大学史料編纂所の写真帳によると、この字が「美」である可能性が高いと思われる。

(29) 杜甫（撰），仇兆鰲（注）：『杜詩詳注』卷11，中華書局，2015年，第776頁。

不能随皂盖，自醉逐浮萍。

この詩は宝応元(762)年、杜甫と漢中王が梓州で会った時に書かれたものである。杜甫は乾元元(758)年に華州を離れて漢中王と別れ、宝応元(762)年に漢中王と再会し、ちょうど五年目になったので、「一別五秋蛩」という詩句を書いた。

3、中国体験

『謙齋南遊集』は策彦が中国滞在中に創作した漢詩の編集であり、策彦の中国での豊かな体験を如実に表している。中国での体験があるからこそ、杜甫と同一の土地に立ち、同一の文化を陶冶できた。ゆえに、杜詩の感情と境地をしみじみ感じ取ることができた一方、中国での滞在は杜詩の研究にも役立った。

中国に滞在中、策彦周良は杜甫にかかわる本を買いあさった。例えば：

(1) 嘉靖十八(天文八, 1539)年七月八日⁽³⁰⁾条：

又得『讀杜愚得』八册全部，換粗扇二柄，小刀三ヶ。

又二柄の粗扇、三つの小刀を以て『讀杜愚得』の八册を換えた。この時は策彦周良が中国に初渡したばかりで、寧波で入京許可書を待っていたころである。その中国文化を知りたい気持ちがうかがえる。

『讀杜愚得』は十八冊あり、共に杜甫の詩1458首と他の詩人の唱和詩11首を収録しており、明洪武十五(1382)年ころ完成され、明朝初期杜詩を研究する最も重要な著作だといえる。作者が単複であり、明代の杜甫学を研究する第一人者だと過言ではないだろう。『讀杜愚得』は杜甫を研究する方法にしても、作者の学術思想にしても、後世の中国学者に大きな影響を与えた。

策彦周良がこの本を手に入れたとき、中国でも流通したばかりで、日本には伝わっていなかったと推測できる。つまり、策彦周良は杜甫に関する最先端の学術成果を吸収した。

策彦周良が進貢の任務を終え、再び寧波に戻って帰国の順風を待っていた間に、『讀杜愚得』を読み始め、その中の知識を摘録した。

(2) 嘉靖十九(天文九, 1540)年十二月五日⁽³¹⁾条：

鳳翔麟游県。讀杜愚詩ノ詩ニアルソ。

(30) 牧田諦亮：『策彦入明記の研究』(上)，仏教文化研究所，1955年，第66頁。

(31) 牧田諦亮：『策彦入明記の研究』(上)，仏教文化研究所，1955年，第161頁。

おわりに

策彦周良は日本五山文学の後期代表として、その漢詩が日本漢文学史上に一席を占めている。これは策彦周良が中国漢詩文を検討することとつながっている。幼い頃から杜甫の詩を勉強し、杜甫の詩集だけでなく、中国の類書、杜甫にかかわる研究著作を買いあさって読んだ。策彦は勤勉さと中国での体験をもとにして、杜詩を頭の中に内面化し、深く理解してきた。杜詩を吟唱することによって気分転換し、杜詩の詞句を適切に自分の漢詩に使いこなした。そのことにより、杜詩がすでに策彦周良の人生にしみじみに溶け込んできたのだ。

策彦周良の杜詩受容を通じて、五山禅林における杜甫受容の一側面を明らかにしてきた。16世紀において、日本は中国文化を吸収していた様子が垣間見え、日本と中国との文化交流が生き生きとして反映されていると言えよう。

参考文献

- [1] 牧田諦亮：『策彦入明記の研究』上、仏教文化研究所、1955年
- [2] 高楠順次郎ほか：『大日本仏教全書』第73巻『策彦和尚入明記』、鈴木学術財団、1972年
- [3] 朝倉尚：『禅林の文学：中国文学受容の様相』、清文堂、1985年
- [4] 簫統編：『文選』、中州古籍出版社、1990年
- [5] (宋) 贖藏編：『古尊宿語録』、上海古籍出版社、1991年
- [6] 『全唐詩』、上海古籍出版社、1993年
- [7] 莫礪鋒：『杜甫評伝』、南京大学出版社、1993年
- [8] 策彦周良：『妙智院所藏史料』、東京大学史料編纂所、2007年
- [9] 葉嘉瑩：『葉嘉瑩說杜甫詩』、中華書局、2008年
- [10] (唐) 杜甫(撰)、(清) 仇兆鰲(注)：『杜詩詳注』、中華書局、2015年
- [11] 劉玉偉、黃碩評注：『古詩十九首 玉台新詠』、中華書局、2016年